

## 歴史と表象——日本における歴史叙述の伝統——

はじめに

今年（平成七年）は戦後五十年という節目に当り、国民各層で歴史への関心が一段と高揚し、日本人の歴史意識の在り方が問われている。また数年前から欧米の新しい歴史理論が数多く翻訳されたり、歴史関係の講座、叢書が相次いで刊行されたり、さらに一般社会人のいわゆる「自分史」の執筆も非常に盛んである。

しかしながらこうした状況の中でも、日本人の歴史への関心の様相を史的に追究する日本史学思想史ないし日本歴史思想史に関する研究は意外に低調である。しかもこの分

野の研究はおおむね個別史書の考察に止まっていて、日本における歴史意識ないし歴史思想の展開を、統一的な視点から通時的・共時的にトータルに描き出すようなスケールの大きい本格的な成果はこれからといっても過言ではないであろう。

さて今年度の日本思想史学会大会シンポジウムのテーマは「歴史と表象」であるが、これは日本人の歴史意識ないし歴史思想をこれまでとは違う新しい視点で検討すべく設定されたものである。これまでも本学会のシンポジウムで歴史思想が取り上げられることは何回かあったが、いずれの場合も主として特定の史書を対象とし、そこに認められる歴史思想の特質や意義を説明しようとするものであった。

石 毛 忠

しかし今回の「歴史と表象」というテーマは、すでに書き上げられた史書をいわばスタティックにあれこれ検討しようとするのではなく、日本人はこれまで歴史に対してどのような姿形を与えてきたのか、すなわちどのような表象で歴史事実を捉えようとしてきたのか、こういう点について討論することを狙いとするものである。なおこのテーマは現在、これまでのような歴史的表象化の在り方がいろいろの意味で再検討されつつあるという世界的動向を踏まえて決定されたものである。

そこで本稿では、このような問題を考える際の基本的前提となる、日本人が古来継承してきた歴史的表象化のスタイルすなわち歴史的叙述の伝統について概観してみようと思う。

### 物語風歴史叙述と実録風歴史叙述の伝統

現存する我が国最初の史書は、いうまでもなく奈良時代に完成した『古事記』（以下「記」と『日本書紀』（以下「紀」）であるが、すでにこの両書の歴史叙述に、その後の日本の史書に共通する二つのタイプが見出せる。周知のように『記』は天皇一代ごとに、系譜、説話、歌謡などを漢字表記の和様文でまとめた史書であり、『紀』は中国の正史を

意識した編年体を基本とする漢文の史書である。歴史叙述の筆法から見た両書の特色については、『記』ではここに登場する神々や人間が歌謡や会話を交えて実にヴィヴィッドに描かれていて、豊かな人間味を感じさせるのに対し、『紀』では前半部を中心に儒教的道德史観に基づく潤色が認められるが、後半部になると実録的記述が著しくなっており、『記』に比して神も人も存在感が希薄である。ちなみに、『紀』には中国正史を特徴づける「論贊」——皇帝以下、歴史上の人物を忌憚なく論評する——が欠けている。実はこうした『記』的歴史叙述と『紀』的歴史叙述が様々なバリエーションを伴いながら、その後の日本史学史を貫く二大潮となっているのである。ここでは仮に前者を（A）物語風歴史叙述、後者を（B）実録風歴史叙述と呼ぶことにしよう。

さて平安時代に入ると、（A）型の史書として『栄花物語』『大鏡』などのいわゆる歴史物語が、（B）型の史書として『続日本紀』以下のいわゆる五国史などが著された。ところで（A）型の『栄花物語』は『源氏物語』螢の巻の物語論（史書批判）の影響を受けて書かれたものであることが明らかにされている。その物語論とは作者の紫式部が物語の主人公である光源氏の口を借りて述べたものであり、主要なところを原文で示すと次のようになる。——「物語は」

神代より世にある事を記しおきけるななり。日本紀などは、ただかたそぼぞかし。これらにこそ道々しく、詳しくきことはあらめ。……その人の上とて、ありのままに言ひ出づるところこそなけれ、よきもあしきも、世に経る人のありさまの、見るにも飽かず、聞くにもあまることを、後の世にも言ひ伝へさせまほしき節ぶしを、心に籠めがたくて、言ひおきはじめてたるなり。よきさまに言ふとは、よき事のかぎり選り出でて、人に従はむとは、またあしきさまのめづらしき事ととり集めたる、みなかたがたにつけたるこの世の外ほかの事ならずかし。」（傍点は筆者）ここで式部が説こうとしているのは、物語の特色である潤色や誇張は決してこの世にない事実無根を語っているわけではなく、むしろ虚構フィクションを通してこそ人間世界の普遍的内面的真実が確実に、かつ典型的に伝えられるのであり、その点で物語は、人間世界の外面的事実の一端しか伝えていない史書（六国史など官撰国史）より遙かに優れているということであろう。『栄花物語』の作者はこうした物語論にヒントを得て、歴史を物語風に書こうという構想を思いついたのである。『大鏡』になると体裁が一段と洗練され、全体が対話形式で統一され、逸話の挿入などによって藤原道長ら貴族たちの個性が鮮やかに描出されている。

中世より近世に著された史書を見ても、そのほとんどは

(A)型か(B)型の歴史叙述であり、(A)型を代表するものとして『平家物語』『太平記』『日本外史』などがあり、(B)型を代表するものとして『吾妻鏡』『本朝通鑑』『徳川実紀』などがある。普通、学術的見地から(B)型の方が重要視されているが、実は日本人の歴史理解に大いに貢献し、その歴史意識の形成に甚大な影響を与えたのは(A)型の方であった。(A)型には『日本外史』のような漢文体のものもあるが、和文・漢文いずれの場合も、豊かな想像力と深い共感に基づく魅力的で読みやすい文章であり、躍動感に満ちた歴史群像の形象化に成功している。ただし臨場感あふれる表現を求めあまり事実の吟味が不足して、客観性に欠ける描写が少なからずあることも事実である。とはいえ荒唐無稽の時代小説とは異なるもので、おおむね史実に沿った内容である。現代の歴史家といえども人物に焦点を当てて中世より近世の時代史を叙述しようとするれば、これら(A)型の史書に頼らざるをえないであろう。

近代になると、当代のヨーロッパ歴史学の影響を受けつつ、啓蒙史学、アカデミズム史学、唯物史観史学などの新しい歴史学が活動し始め、それに応じて歴史叙述のスタイルも多様化していった。その中で上述した(A)(B)二種の歴史叙述のうち、(B)型の方はアカデミズム史学に継承されさらに発展していったが、(A)型の方は非科学的

なものとして歴史学の世界から排除され、潜在化していった。ところで戦前から戦後にかけて日本における歴史観の主流は皇国史観から唯物史観へと大きく転換し、唯物史観による歴史研究が隆盛を極めることになった。しかし他方で、科学的歴史観と称し歴史の法則性を主張する唯物史観の欠陥も次第に広く認識されるようになり、そういう中でいわゆる「昭和史」論争が起ったのである。この論争は日本史学史上きわめて重要な意義を有するものであるが、今ここでそのすべてについて詳述する余裕はないので、日本人の歴史叙述の伝統という観点から見て注目される点についてだけ言及するに止めたい。

周知のように「昭和史」論争は、昭和三十年に岩波新書の一冊として刊行された遠山茂樹他著『昭和史』に対し、文芸評論家の亀井勝一郎が真つ向から批判の矢を放ったところから始まった。いうまでもなく遠山は唯物史観にたつ著名な近代史家であり、この『昭和史』は当時類書がなかったことも手伝って刊行後多大の反響を呼び、たちまちベストセラーになった。『昭和史』に対する亀井の批判は多岐にわたるが、本稿との関連で最も興味深く感じられるのは、本書は歴史の人間性を忘れて、とし、人間の描写に失敗している」と指摘している点である。とりわけ「歴史家は死者の声を代弁し、その魂をよみがえらせ」なければなら

らず、死者への「共感能力の欠如は、それだけで歴史家の資格を欠く」と断言する亀井の主張には、古代以来連続と続いてきた(A)物語風歴史叙述——歴史の人間像を浮き彫りにする——の精神に通底するものが看取される。(亀井の所論はすべて『現代史の課題』(中央公論社)による)

おわりに

以上概観してきたように、日本史学史においては(A)物語風歴史叙述と(B)実録風歴史叙述への志向が一貫して併存しているのであり、そこに日本における歴史叙述の伝統が見出せる。なおその他に中世以降(C)特定の歴史観によって歴史を理論的に考察した「愚管抄」をはじめとする史論書の系統があり、(A)(B)型と異なる叙述スタイルをとっている。しかしこの(C)型の歴史叙述はその事例が近代以前では極めて少ないこと、さらには中世以来現在まで大方の日本人の歴史意識に与えた影響力が甚だ微弱であることなどを考慮すれば、(A)(B)型のように日本における歴史叙述の伝統を形成していたとはいえないであろう。(この(C)型の歴史叙述の意義については、別の機会に詳述したい)

冒頭述べたように現在欧米諸国では、これまでの歴史的

表象化の方法すなわち歴史叙述の在り方が批判的に検討されている。これからの時代にどんな歴史叙述が相応しいのか、この点についてはさまざまな議論があるであろう。ただ日本において多くの国民に支持されるような新しい歴史叙述のスタイルを考えようとするならば、まず大学の日本近代史の授業で小説家司馬遼太郎の『坂の上の雲』がテキストとして使われているという現状を直視すべきであろう。紙幅の制約のためとはいえ、論ずべくして論じえなかった所があまりに多い。それらについては、他日改めて論究したいと思う。

〔付記〕

小論の構想段階で、左記の著書を部分的に参照した。

○堀米庸三『歴史と人間』(NHKブックス32)(日本放送出版協会、一九六五年)

○柴田卓弘『歴史と歴史家たち』(大明堂、一九九三年)

○ソール・フリードランダー編、上村忠男他訳『アウシュヴィッツと表象の限界』(未来社、一九九四年)

(防衛大学校教授)